

音声指導の実践から

—発音指導の具体的方法への試み—

羽澤 志穂・今 麻衣子・今野 成子・黒岩 幸子
李 驩眞・酒井 清夏・竹山 桜子

【キーワード】 音声指導・具体的な練習方法・教師の弁別判断力・クラスコントロール

1. はじめに

日本語教育において、音声教育が他分野よりも遅れているとの指摘を受けてから久しいが、いまだに、「音声教育はむずかしい」「何をどのように教えればよいかわからない」という現場の教師の声が続かないという（松崎 2001）。確かに、以前は音声に関して基礎研究自体が少なく、「日本語の音声はどのような特徴を持っているのか」ということを把握することも容易ではなかった。しかし、現在では、日本語教育への応用を視野に入れた音声・音韻の入門書は、質・量ともに充実してきている。そのため、音声教育で扱うべき指導項目について、知識を得ることは難しくない。それにもかかわらず、なぜ、教師は音声教育に対する苦手意識をぬぐうことができないのか。それは、音声教育を行うための具体的なイメージを持てずにいることに要因があると考えられる。つまり、入門書や基礎研究文献から得られる情報と、現場の教師が求めている情報とに、隔たりがあるということである。では、教師がほしい情報とは、いったいどのようなものなのだろうか。

そのことについては先行研究から示唆を得ることができる。たとえば、金田一（1997）は音声教育の中でも特に発音教育について、日本語教師が持っているに違いないアイデアや工夫を広く発表し、情報を共有することの重要性に言及している。さらに、河野（2004）は、実際の指導を通じて教師が気づいたこと、疑問に思ったことを教師同士で共有し合い、話し合う必要があると述べている。つまり、音声教育を行うにあたって教師が求めている情報とは、現場での具体的な指導方法であると言えるだろう。いざ指導を行うとなれば、学習項目の提出順序をどうするか、学習者のタイプ・レベルに応じた練習方法にはどんなものがあるのか、学習者の誤用に対して、どのように、どの程度指摘すればよいのかなど、教師が直面する問題が非常に多いということが予測される。しかし、実際に指導をしてみないと、本当の問題点も、その対応策も、わからないものである。そのため、指導報告などを通じて現場からの情報を得ることが不可欠である。ところが、実際の指導報告は、決して多いとは言えない。たとえば、河野（1999）のように、教師から出された質問について具体的に対応策を述べている報告例はごく少ない。

そこで、音声教育に対してなかなか踏み出せずにいる現場の日本語教師たちの後押しをするため

にも、音声教育を促進していくためにも、実際の音声教育現場から具体的な指導方法についての情報を発信していく必要があると考える。

2. 本研究の目的

早稲田大学大学院日本語教育研究科では日本語教育研究実践(10) (以下、実践(10)) という科目が実践の場として設置されている。上記のように音声教育分野での研究の少なさや具体的な指導法に悩んでいる教師が多いと指摘されている中、実践(10)では大学院生が実習生として音声教育実習を行っている。そこで実習生達が抱えた悩みや問題意識は他の日本語教師にも共通するものだと考えられる。よって、実習生達が実際に音声指導を試み、その際どのような問題に直面し何を感じたか、解決のためにどのような方法を用いたのかを共有することは、同じように悩みを抱えている教師にとって有益な情報になると考える。

以上に鑑み、本稿は音声指導の実践を通し教師が実際に抱えた問題や工夫を分析することにより、音声指導の方法への示唆を得ることを目的とする。

3. 実践(10)の概要

3-1. 実習の概要

実践(10)は上述したように大学院日本語教育研究科設置の科目であり、早稲田大学日本語研究教育センター別科によって設置されている留学生対象の授業(発音 3-4B)でもある。2006年度秋学期の発音 3-4B クラスには初級後半から中級前半レベルの学生 33 名が登録していた。受講した学生の発音に対する問題意識も高く、自分の発音を上達させたいという強いニーズが感じられた。テキストには『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』(スリーエーネットワーク)を使用し、全 11 回実施され、週 1 回 1 コマ 1 課のペースで進められた。毎回の授業では、前半は担当教員によるクラス全体に対する授業が行われ、後半は実習生によるグループ指導が行われた。実習の流れは表 1 の通りである。

表1 実習の流れ

準備	担当者が教案と補助教材を作成。メールやミーティングでその内容について全員で確認・検討。
実践(10)	当日の授業の最終確認、前回の授業報告、次回の教案確認、担当教員の指摘・指導。
発音 3-4B	担当教員による一斉授業の後、留学生への音声指導。
実践後	その日の授業の反省会、次回授業の打ち合わせ。担当学生の宿題のフィードバック。

3-2. 院生の受講動機

今学期の実践(10)では、日本語教育研究科のさまざまな研究室に所属する 7 名の院生が受講した。それぞれの院生はどのような目的でこの実践を受講したのか、実践開始時に書いていたものを読み返してみる。すると、「音声に関する体系的な知識を身につけたい」「体系だった発音指導の方法を学ぶ」「問題分析が行えるようになりたい」「適切な指導ができるようになりたい」「自分ひとりでは

気づけない点を学ぶ」などが挙げられていた。そして、最も多かったのは「具体的な指導方法を身につけたい」であった。この「具体的な指導方法を身につけたい」という受講動機から、院生は「1. はじめに」で述べた多くの教師達と同じ問題意識を抱えているということがわかる。

4. 調査

4-1. 調査対象

本コースでは、実習生は毎回実習を録音し、実習終了後に実践研究報告シートを作成、提出した。報告シートには、実践日時・学習者とその母語・使用教材等の基本的事項の他、音声練習内容、学習者からの質問、感想・反省、学習者の誤用を書き込む。各実習生は自分の実習を録音したテープを聞きながら、報告シートを作成し、実習を振り返る。音声で確認することで、実習中には見えなかった問題点・成功箇所等も発見でき、実習生にとって非常に役に立つものであった。また、毎回1～2名の受講生は他の受講生の実習の見学者として観察にあたったが、見学者は実践研究見学報告を作成、提出した。この他者の目を通した報告からは、内省で見落としした点への指摘に繋がった。このことから、報告書には、自己モニター、他者モニターを通した感想・反省欄の記述には実習生の気づきや抱える問題点、解決策が現れていると思われる。

筆者らは、この感想・反省欄の記述を抜き出し、分析することで、本コース受講生の実習上の問題点が明らかになるのではないかと考えた。

分析対象は1課から8課、受講生7名の実践研究報告シートの感想・反省欄の記述であり、総コメント数は298に上る。

4-2. 分析手順

筆者らは実践の問題点、成功の要因を分析するため、まず、298のコメントをその内容により整理・分析し、情意・フィードバック・授業運営・学習項目・外的要因・教師の行動の6つのカテゴリーに分類した。学習者に応じた授業運営 (JU) はコメント数が145(全体の約50%)と際立って多かったため、さらに5つの下位分類を行った。下位分類はA:練習方法 B:弁別判断 C:クラスコントロール D:音声指導方法 E:その他である。各カテゴリーの内容は以下の通りで、コメント数の内分けは表2に示した通りである。

- ・ 情意 (JO) : 教師・学習者の情意に関する記述。
- ・ フィードバック (FB) : 学習者へのフィードバックに関する記述。
- ・ 学習者に応じた授業運営 (JU) : 学習者要因による、授業運営のあり方に関する記述。
- ・ 授業の学習項目 (GK) : その課で学習する項目であり、事前準備に関する記述。
- ・ 外的要因 (GY) : 補助教材に関する記述が主となる。
- ・ 教師の行動 (KK) : 教師の立つ位置や学生の座り方、教師のしぐさ等に関する記述。

また、実習生は自分のコメントの中の問題点が起きた原因について、運営・学生に関する知識、学習項目に関する知識、準備、弁別判断力、外的要因の5種類のカテゴリーを設け、それらに該当

するものをチェックした。しかし、この結果は今回の分析・考察には含まなかった。

コメントの内容は、音声指導に特徴的と思われる項目（例えば、学習者の音声上の誤用は分かっているけれども訂正できない等）と、特に音声だけに見られるわけではなく、日本語教育全般的に共通して見られるのではないかとと思われるものがあつた。そこで、音声教育において実習生は何に困難を感じ、何が出来ないのかなどの具体的な問題点を探り、また、上手くいった例から問題解決策を探るため、筆者らの判断で音声指導に特徴的と思われる項目のみを取り上げ、更に詳しくカテゴリーごとに分析し、考察を加えることにした。

表2 報告の感想・反省欄における記述の分類カテゴリー

	カテゴリー	コメント数	%	
JO	情意	42	13.7%	
FB	フィードバック	19	6.2%	
JU	授業運営	A:練習方法	145	47.40%
		B:弁別判断		
		C:クラスコントロール		
		D:音声指導方法		
		E:その他		
GK	学習項目	39	12.7%	
GY	外的要因	26	8.5%	
KK	教師の行動	35	11.4%	
計		*306		

* 表の中でコメント数の合計が306となっているのは、コメントを分類する際、2つのカテゴリーにまたがるものは、それぞれのカテゴリーでカウントした為。

4-3. 分析と考察

音声指導に特徴的であると考えられる内容のコメント数は42であった。コメント数の内訳は表3で示した通りである。本節では表3のカテゴリーに従って分析し、考察をおこなう。なお、表4～6、及び表8～10中のコメントは各実習生が実践報告として提出した原文をそのまま掲載した。

表3 各カテゴリーの音声指導に特徴的なコメント数

	カテゴリー	コメント数	%	
FB	フィードバック	11	25%	
JU	授業運営	— 練習方法	10	23%
		— 弁別判断力	6	11%
		— クラスコントロール	3	7%
		— 音声指導方法	4	9%
		— その他	8	18%
計		42		

4-3-1 練習方法

JUの下位分類の中では練習方法に関するコメントが一番多く、音声指導に特徴的だと思われるコメント数は10(23%)であった。コメント(感想・反省)の詳細は表4の通りである。

表4から、音声活動を行う際、授業運営のなかの問題点と解決策がみられる。まず、練習方法の問題点として、音声は練習が単調になりがちなので、どう面白く維持するかということが教師の一番の悩みであったことがわかる。尚、その他にも、「口で済ませる」(表4④)や「全体での練習が多い」(表4③)などの問題点が挙げられた。

このことから、練習が単調にならないようにするためには教師のモデル発話→リピートという繰り返しだけでなく、場面を設定した文脈の中で練習したり、リピートの際にコーラスと個別のバランスよく使って練習したりするのが望ましいのではないかと思われた。また、学習者自身の音声面での意識化を促すため、学習者に音声のルールを発見させたり、そのルールと照らし合わせて発音させたりする練習を行うことも役に立った。さらに、アクセント辞典の使い方を説明するなどの学習ストラテジーを教えることで、教室外の自律学習につながると思われる。

表4 JU(授業運営)のカテゴリー内で見られた練習方法についてのコメント

	課	コメント(感想・反省)
①	1	ミニマルペアクイズ:問題の語が単純すぎた。もっと難しい漢字熟語なら満足感が得られたのではないか。
②	1	練習がおなじパターンで単調。
③	2	全体での練習が多かったので、もう少し個人練習もやるように気をつけたい。
④	2	今日の活動は主に口で済ませていたが、そうだと単調になりやすいので、手を用いるなどもっと工夫をする必要があった。
⑤	3	練習が全体的に単調になってしまった。学習者の注意が少しそれてしまう場面があった。
⑥	4	話しことばに慣れていない人もいるので、以下は、段階を踏んで導入した。わかりやすかったよう。例:~ちゃおう(ちやう→ちゃおう)、~てこう(てく→てこう)、~とこう(とく→とこう)、~たげよう(たげ→たげよう)>
⑦	4	単調になりがちな練習な上、話し言葉をよく使っている人は退屈そうだった。
⑧	4	場面を設定し、場面に合った話しことばを言わせる練習を取り入れたら、少しは活気が出た。
⑨	6	辞典の引き方をS全員が実際に引いて確かめられたので今後自分で形容詞のアクセントタイプを知る時に役立つと思う。
⑩	7	正しく繰り返すことはできるので、モデル音声を聞かせる前にルールと照らし合わせるなどまずは自分で発音させるよう心がけた。

4-3-2 教師の弁別判断力とフィードバック

JU内で練習方法の次に多く見られたコメントは、実習生自身の音声指導に必要な弁別判断力に関するもので、コメント数は5(11%)であった。また、JUの弁別判断のコメントとFBのコメントは、内容的に深くかかわっているため、ここで合わせて分析・考察を行う。

FBに関するコメントのうち音声指導に特徴的だと思われるコメントは11(25%)あり、弁別判断と合わせるとコメント数は16で36%を占め、実習生にとって大きな課題となっていたといえる。以下の表5にJU内の弁別判断力に関するコメントを記す。また表6にFBにおけるコメントを記す。

また、これらのコメントから弁別判断力とそれに基づく指導力には表7に示した6つの段階があ

と考えられた。音声の指導においては、知識だけがあっても指導にはつながらず、その場での瞬時の判断が必要である。例えば、表5のコメントからは母語話者だからといって客観的に捉えられるわけではないことに問題点があることがわかる。これらの問題を解決するためには、無意識に接していた音声に対して意識化を進めることが必要である。学習者の音声に対して敏感な意識を持ち、音声を瞬時に捉えられるようになるために、教師自身も音声項目に関する知識に基づいて発音練習・聞き取り練習を繰り返すという訓練を通じて弁別判断能力を養う必要があるだろう。

一方、有益なコメントも見られた。「瞬時に判断できなかつたところがあったので、きちんと目を通しておく必要がある(表5⑥)」というコメントは、経験の少なさに起因すると考えられる問題点を、音声的な誤りの傾向を推測し準備することによって補える部分もあることを示唆していると思われる。

次に、「私が聞き逃した間違いを指導教員に指摘してもらった(表6②)」というコメントからは、他者からの指摘により解決が図れることも考えられる。

また、「文字起こしにより、自分の発話の問題点が見えた(表6⑤)」というコメントも見られた。自分の授業を録音したテープを聞くことにより、瞬時の判断はできないにせよ見逃した誤りに気づくことができる。そのため、同じ間違いが起こったときに注意ができるようになると思われる。そして何を見逃しているのか問題点を明確にすることが、弁別判断力の向上につながると考えられる。ただし、「録音したものを学習者と一緒に聞きながらフィードバックをするのは難しい(表6⑦)」というコメントもあり、その場に学習者がいると音声に集中できず、瞬時の判断が難しいことがうかがえる。そのため、授業中に学習者の音声を録音したものを使用することは、その場で瞬時に判断しフィードバックできるための弁別判断力を向上させるという目的にはすぐわないと思われる。しかし、学習者自身の気づきを促すという点では非常に役立つため、録音する際にはその目的を明確にするよう配慮すべきであろう。

表5 JU(授業運営)のカテゴリー内で見られた弁別判断力についてのコメント

	課	コメント(感想・反省)
①	1	皆発音できていたように思ったが、後でテープを聞くと誤りがもっとあったことがわかった。その場で注意して聞く必要がある。
②	1	5. 撥音 できているのにもう一度練習させてしまった。
③	3	コーラスでは上手にできている感じがしてしまうが、Sに一人ずつやってもらうと意外と難しい。やはり確認が必要と思われた。
④	5	しかし、アクセントがどこがまちがっているのかこちら側が判断できないことは問題だと感じた。
⑤	7	【活動】で、学習者の話の中の発音の誤りがあまりなかったように思い訂正しなかったが、後でテープを聞くと誤りが他にもたくさんあった。単語や短い文章の中よりも、もう少しまとまった話の中で出てくる誤りに気づきにくいことがわかった。その場でよく注意して聞き、訂正できるようにしたい。
⑥	8	最後のタスクの答え合わせのところで私自身が瞬時に判断できなかつたところがあったので、きちんと目を通しておく必要がある。

表6 FB(フィードバック)のカテゴリー内で見られたコメント

	課	コメント(感想・反省)
①	1	学生の間違いを指摘することは出来ても、適切な指導が出来ず、モデル音声を提示することしか出来なかった。
②	1	私が聞き逃した間違いを指導教員に指摘してもらった。
③	1	B/C のカタカナ語のアクセントの最後が上がっているように聞こえるのを指摘できていなかった。
④	2	単語レベルの発音がしっかりできていないと、Q/A 練習でもできるはずがなく、また訂正も難しく、見逃している箇所もあった。発音の時間である以上、十分な単語レベルの練習は重要であると感じた。
⑤	2	文字起こしにより、自分の発話の問題点が見えた。
⑥	3	誤用を聞き逃さない。
⑦	4	但し、録音したものを学習者と一緒に聞きながらフィードバックするというのは難しい。この報告シートを書くため、再度聞きなおしてみると、指摘不足であった。
⑧	8	学習者の発話でも、既習項目のアクセントはもっと指導した方がよかった。
⑨	8	自分の発音については学習項目だけではなく、他の要素の発音にもっと気をつけるべきだった。授業では学習項目に集中させるとしても、院生はモデルとして発話をしているので、他の項目も完璧に発音するのが、信頼性の面でも、学習者の習得の面でも望ましいだろう。前もってもっと予習をして自分のアクセントには厳しくなる必要があると思った。
⑩	8	一つ一つの項目に集中して訂正し、文全体の滑らかさには厳しく言わなかったが、もうちょっと練習した方がよかったかも。
⑪	8	今回特に注目したのが、誤りの訂正の仕方である。どの程度を誤りとするか、またどこまで繰り返し練習するかが、様々であったからである。自分でもいつも授業を録音したテープを聞いて思うことであるが、判断が難しい。学習者の誤りを聞き分け瞬時に訂正を行ったり、

表7 教師の弁別判断力における問題点の6段階

	段階
1	知識がない。
2	知識はあるが、誤りに気づけない。
3	その場での瞬時の判断ができず、指導につながらない。
4	誤りが判断できるが、的確な指導方法がわからない。
5	誤りが判断できるが、的確な指導を行うことができない。
6	誤りが判断でき、的確な指導を行うことができる。

4-3-3 クラスコントロール

JU内のクラスコントロールに関するコメントは表8に示した通りである。JU内のクラスコントロールについてのコメントは、全体の流れを決めるという点から音声教育の流れを考える上で重要である。コメントの中に、声が小さく聞き取れない(表8①)という指摘がある。このことから、学習者の発話の音が聞こえることは、音声指導の際には特に重要であり、同時に聞くことのできる環境を整えることが必要なことがわかる。これは、音は消えてしまうものであり、聞き取れないと何も残らないということ、そして学習者からの音が聞こえないと指導が出来ず、4-2-2で述べた、弁別判断力にも影響すると解釈できる。

次に、発話量が異なった(表8②)という指摘からは、グループ活動においては練習量に不公平が出ないように学習者一人ひとりの発話量のバランスに配慮し、同時に、教師が発話しすぎて学習

者の練習の機会を奪うことが無いようクラスコントロールを行うことが必要だとわかる。授業の様子を録音したものを聞いて自分の発話量に関して客観的になるよう努めることなどが必要だと考えられる。

そして、おとなしい学生をどう参加させるか(表8③)といった問題に関しては、学習者の情意的側面が関係すると思われる。学習者によっては、間違えることがはずかしいと感じる場合も多く、発話に対しての情意フィルターが高くなると考えられる。だが、発音指導においては、学習者からの発話を中心に展開するため、出来るだけ教師と学習者、学習者同士の関係性を築き、学習者が活動しやすいクラスコントロールすることが望まれると言えよう。

表8 JU(授業運営)のカテゴリー内で見られたクラスコントロールについてのコメント

	課	コメント(感想・反省)
①	6	また、【+α】のところなど学習者がいろいろ話してくれたが、声が小さくテープでは聞き取れないところがあまた。全員に聞こえるようにするためにももう少し大きな声で話すよう促したほうがよかった。
②	3	Sの発話量が、異なったので、自らはなさないSにはこちらからもっと働きかけが必要であった。
③	4	自由会話では話しことばを意識しながら会話を進めていた。おとなしい学生をどう参加させるかを考えなければならぬ。

4-3-4 音声指導方法

今回の実践では、学習目的である音声知識をどのような指導法で学習者に理解しやすく伝えるか、また、どのような練習方法で効果的に音声項目を身に付けさせるのか、が重要な課題であった。練習方法については4-3-1で述べており、ここでは、下記の表9におけるコメントから「音声指導方法」についての示唆点を探りたいと思う。

まず、表9①には、「手拍子」という方法を用いたことで、普段は流暢に読める言葉を学習者が「苦戦した」ことが書かれている。ここから、その課の指導項目だからといって、音声の知識を提示することに執着することは逆効果を起こす可能性もあり、音声知識を過剰に提示することに警戒し、教案に縛られすぎずに学習者の音声の習得段階に合わせた指導方法を考える必要があることが分かる。

また、表9②は、ロールプレイを導入した活動に関するコメントであり、音声以外の点に焦点が当てられてしまったということが書かれている。このように、ロールプレイは容易にタスクを与えることはできるが、目的がずれてしまうことにより生じる弊害にも考慮しなければならないことが示唆された。これは、表9③の「モデル音声を聞いて正しいアクセントを選ぶことができるが、アクセント核がどこかを質問すると答えられない」とのコメントからも同様のことが言えるだろう。また、「ハミングをしてみるとわかりやすいようで、答えを見つけられた」とのコメントから、アクセント核の存在を示す方法として、「ハミング」が有効に使われる可能性があることも分かった。

最後に、表9④は学習者同士で音声に関するクイズをだしあう活動についてのコメントである。ここからは、学習者同士が問題をだしあうことから、教師のモデル発音と異なる発音を提示すること

になり、「Sの問題と答えは一致してもTには違うものに聞こえる」というような問題点も生じる可能性があるため、注意を払う必要があることが分かった。

表9 JJ(授業運営)のカテゴリー内で見られた音声指導方法についてのコメント

	課	コメント(感想・反省)
①	3	普段は流暢に読めることばでも、手拍子をつけながら読むとそのリズムに合わせられず苦戦しているようだった。
②	4	【応用練習3】ではその場で「会話をする」というより、「会話を作る」という感じになってしまった。
③	7	モデル音声を聞いて正しいアクセントを選ぶことができるが、アクセント核がどこかを質問すると答えられない。ハミングをしてみるとわかりやすいようで、答えを見つげられた。
④	7	応用練習3のクイズでは、ひとつの問題にたくさんの答えが出たり、Sの問題と答えは一致してもTには違うものに聞こえたりという場合もあり、混乱のままに終わった感じであった。

4-3-5 その他

下記の表10には、自分の音声指導に対する実習生の意識が伺えるコメントをまとめた。

今回の実践で教師として参加した実習生は、教室内で音声指導を行う立場にあり、常に「モデル」として発音を提示しなければならなかった。しかし、表10①と②のコメントから、実習生は自分の音声に対し自信を持っておらず、モデル提示の際、揺れが生じてしまうなど不安を抱くことが分かった。また、表10①の「ゆれがあったため、学習者にわかりにくかったと思われる」とのコメントから、このような不安が音声指導にも影響を与える可能性があることも明らかになった。

また、授業中に出る学習者の誤りには、当日の学習項目ではない音声項目や文法などの音声外項目も含まれており、表10③～⑧のコメントには、実習生はどのように対応すべきかについて悩んだことが示されている。さらに、表10⑥、⑧のコメントから、そのような問題には限られた実習時間という問題も関わるということが分かった。授業毎に決められている学習項目に対するフィードバックは当然行うべきであろうが、学習項目以外の問題点をどの範囲まで対処するか、またそれらの項目に対する指導をどのように上手く授業に取り組むかということは、その授業の目的や時間、学習者により柔軟に対応する必要がある。

表10 実習生の音声指導における難しさの意識

	課	コメント(感想・反省)
①	3	自分のモデル発音のときに、自信をもって発音できず、ゆれがあったため、学習者にわかりにくかったと思われる。
②	8	自分のアクセントに自身がなく、訂正した内容に不安を感じた。また、直すべきものをそのままパスしているのではないかと不安になった。
③	1	アクセントの問題もあったが、今回の学習内容に注意を集中するように、それは特に指摘せず、デモ→リピートのみにとどめた。
④	2	文で練習をする時や、学習者同士でモニターする時などで、学習項目以外のことを指摘する時があるが、どこまで反映して修正すればいいかちょっと迷った。

⑤	2	学習内容である曜日の拍はできていたが、やはりまだ文法などの間違いは多かった。今回は会話の内容がけいたいわかればよいことにしたが、今後どのように対応したらいいのか。
⑥	4	今日の学習項目を取り入れた会話は作ることはできていたが(中略)その他の点でこなれていない表現もあり、できた会話を指導する時間が取れなかったのが残念だった。
⑦	4	話しことば以外の会話の流れなどに十分なFBができなかった。
⑧	8	ロールプレイの発表では、文法の間違い・アクセントの誤用(多数)、オノマトペの文中での使い方(前後のことば)の不適切さなど、あまりにもたくさん問題があり、それらを全てチェックし発音練習させるには時間がなく、そのまま流してしまった。

5. まとめ

院生が今回の音声指導に参加しようと考えた動機から、皆それぞれに音声教育に対する問題意識を抱えていたということがわかった。その問題意識のひとつが「体系的な知識が不足している」であった。しかし、指導を通じて問題意識の内容は徐々にシフトし、「知識はあるが判断ができない」に変化した。なぜかというところ、「知識の不足」に対しては、教案の検討・話し合いなどの事前準備の中で補っていたからである。一方、多くの院生が抱えていた「具体的な指導法がわからない」という問題意識については、実習中も常に悩まされていた。これは、「練習が単調になってしまう」等のコメントにも現れている。この他にもまだまだ解決できない問題点が多いのだが、実際にやってみたらこそ意識することができた問題も多い。

筆者らはこの実習から、以下の工夫を見出すことができた。

◇練習方法

- ・場面を設定し、文脈の中で練習する
- ・リピートの際、コーラスと個別のバランスに気をつける
- ・学習者自身が音声ルールを発見し、ルールと照らし合わせて発音できるよう誘導する
- ・アクセント辞典の引き方を練習する

◇教師の弁別判断力

- ・意識化を進める練習を繰り返す
- ・学習者の音声的誤りの傾向を推測し準備する
- ・自分では気がつかない問題点を他者から指摘をしてもらう
- ・録音した音声を聴いて、授業中に見落とした学習者の音声的誤りがないか確認する
- ・授業中に学習者の音声を録音したものを使用する際は、目的を明確にして録音を行う

◇クラスコントロール

- ・声がよく聞こえるよう環境を整える
- ・学習者一人ひとりの発話量のバランスに配慮する
- ・授業の様子を録音したものを聞いて、自分の発話量に関して客観的になるよう努める
- ・学習者の性格を考慮しつつ関係性を築く

◇音声指導方法

- ・アクセント核を捉える練習に「ハミング」を取り入れる。

このように、具体的な練習のテクニックや方法のバリエーションを増やしていくことが、問題解決のための対応策のひとつと考えられる。「『難しそう』『指導法がわからない』『研究結果を待っている』、だから音声指導は行えない」という理由はいつまでも通用するわけではない。音声教育研究を促進するためにも、現場からの知見を積極的に発信する姿勢を持ち、実践に取り組む必要があるだろう。

【参考文献】

- 金田一秀穂 (1997) 「音声教育」『日本語教育』94, pp. 66-69.
- 小池生夫編集主幹 寺内正典・木下耕児・成田真澄編集 (2004) 『第二言語習得研究の現在—これからの外国語教育への視点』大修館書店
- 河野俊之 (1999) 「毎日の音声指導法」『月刊日本語』12 (8), アルク, pp. 24-31.
- 河野俊之 (2004) 「音声教育で必要な研究について」『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するのか』平成 12~15 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書 pp. 52-65.
- 松崎寛 (2001) 「日本語の音声教育」『日本語教育学シリーズ第 3 巻 コンピュータ音声学』おうふう, pp. 207-258.
- NHK放送文化研究所 編(2006) 『NHK歩日本語発音アクセント辞典新版』日本放送協会
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク

(ハザワ シホ・修士課程1年)

(コン マイコ・修士課程1年)

(コンノ シゲコ・修士課程1年)

(クロイワ サチコ・修士課程1年)

(イ ファンジン・修士課程2年)

(サカイ サヤカ・修士課程1年)

(タケヤマ サクラコ・修士課程1年)